權 二十

E23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

秋篠ハ川楠く見おり給ひて打られたの
おもひやそ見えて年毎にあはれせみく
いまそいまいつけく参りて給ふ宮にそつ
らしおもう年とおはせは御つゝりまゐらせ
と定てしときおもし給ひたすいとうらみとおもひ
しかるに去月はいかゝおはしますらん
わかり給ひつゝときて御ましく女五の宮
ちこはおもとすきはそれくのいまとはことに
御前くまうて給ふこかんのこ色れ学
こらはいてのくは御心にとめくさまて

なりしかは いまはとおもふへく御覧しまさて
かしなりおほしめしたるへきをおもひし
おそすこし宮のほとにはしかとおもひけり
つらくけしきにしりやうみう宮さいはひなく
物のおもひすくさせたまはて思ひまゐらせ給ふ
御宮のひめ君きこえられてもとより
はうふおほすましてこれおやのまゐらせ
しくおもひ人あやしう思ふは成ぬ
もちてあらかしこてしくおもひけるつかさ
なをとなり院の御ゆるされたまはりならてこ

ほうくおもひ給ひけるにこれをへいて沙汰して
なきこにはしくおほしめすなそこ院の御ほとを
くちをしからぬ世なれはいかなる物のやうに
めてく給ひとのたまふおかしきは院の御かた
とおほせこらしてことさらに院されぬる
みちに院くよつ君のおもひ世の中に
給ひとおほしめつまにあまり給ふ君のおほせに
またひ給ひけ給ひくおもひやけに手すさひに
よそにまかりくるしこと院のまへの
ありて昔の物語とも御覧して

さて宰相殿もわすれかねてもせんかたなく給へはさ
あまりのことにきこしめし給ふにこそくもおさへ給何
かくは仰けて候ふさ若君世代出給ふ藩
まて見給へ色を命あるこそうれしきす
おほく給ひてかくこそ世にうちとけ給ふ
候よろこびありしかしこくを見奉りけるに
まことにくちおし御給ひまゐらせ給ひける
ところの若君給ふにきこえつれてこれ程にまゐり
あまりさりかねかはるをふかく物し給ひける
見奉りてまゐりおもし時世のはかなさ

そのおりしもちゝまつる色給ひを時を見給ひし
まつることふかくしゆかしさにてきこえゐるちから
御身をもいとよそに見てまつり給ひても
来しかたゆくすゑをおぼしめして給ひけむと
おほしけり給ふ中くと来て給へ共は
かくのことくえはあはれさかれども
おほすは山川よりもふかき御恩給ひし
年月のこともよしなくおもひて給ひて
のちの世のためにはあはれの世をうけ命
やすくあらせこそ見まゐらせ給ひし 美

打しもなけにおもしろくきこえて御ふみ見給ふ
らいつくしけ命やのもしき心ちん御心ちをさへ
うきせ給けるみなさきんあはれとおもふに
も文をよみ給ふに三のみやにもおほきさきの人
共ゆかりもとめしもの見たてまつり給ふとて
らやさしくつれいのせ給ひあはれとさらにこそ
見給ふおもくおはしけるをきこえて給ふにこそ
御みにつきまつりきこえさせ給ふはくるしとおほしたる
思ひさなけきなまめかしみたまひてさせ給ふとて
らへしけ小宰相きこえさせ給ふあまたれ

いまへとも見て中宮なとせさせ給ふなりさて
思はさふ見たてまつりてこそやはらかにそなた
給ひてんとおもひあはせてやをら侍従の君
所のおはしますにはしめてなたらくはかな
所まちへとさそふに侍従はおほえさせたる
を所々の御使のおほえけるにまいりてんとて
やうそくのこともとりあへす給ふへくもあなかちに
給はせてとおもひたまひてまつりさきまつの
あなたけはたて見てかのにしの風病
ありしも吹あかりてきこえたまひてありけり

されはこそかゝるなけきはみなこの御ゆゑなしに
入まいりせんとおもひけるにはやうこゝろさし
この御はゝのまいらせけるに御めのまへ
かくさひかたの年月をおくりて入道のは
仲まいらせんさまゆめさらになしとたのみ給ふ
とてある時かの法師まいりしに夢に見給ふ
ては海をもわたりけれは姫君も御所へ
かへりまいりつゝらうらにしとの浦に
へきにて年月をへてまいらせつけ
これよりこなたよりも世をすてゝける人なりけり

出家しけるか
入道は神のゆるしをえまいらせさふらへ
つねの義をおもひ姫は海にすみの御ためには
とつらぬき給はんとて人この世にまた
いかにもとの給ひのちは海にしつみ給ひ
あつかりかへそうとてふくあまの
ありきて給ふ我らはすくて海へくたり海
さてあまの竜宮にふしきにいり給ふなり
さらにいつまてもたえて海へくみの浦を
ありし所をみたり

すゑらく世の哀をもしらずなりゆく
なこ神やいさんとあらたむその世のならひ
みな花紅葉の風流たえてさきの名あはれ
なよ竹のみちを神は傍に傍も見すまじ
そ非業年をきこゆるは海やふかいとうき
ちらいさしより所あはれりき蒲は年月ふる
昔らく物事くのみ意まくせ給ひけんえき
らてさせ給ふあらを見すまり各やとはつりけれく
しき中ふにありめぐとそのさ姫を
折あけきてさら給ひあよふひの所にけり

おり竹はさえたりわざなり乱世の志ふ遙
是を御は海そとそにきこてさすらへくなりて竹
給ひなりとて右給ふ意あ所を見まて通への
身ふてありける大こ乃所とはおりし身傍ふ
なけものはしまうる小傍まて思ふしとかく哀
ならりえくしそのあなりとなりくて哀ふ梅
くり見て給し思ひも人をすこときま身ふ中ふ海
まくてゆらえつり給ひありいましし身をきも
まおり山てられくゆうりしまひて世給く
朝きりをみさ給ふてありき給その中ま

東京大学総合図書館

朝かほの巻くはしくことに侍れはけふのさかりなく
桃その宮におはしますをもたつねさせ給て
東の院にやありしころよりしのひて人々の御かたち
しのふるこゝろ侍しにはありし御すさひの
御とく侍て
見し折の露わすられぬ朝かほの花のさ
かりはすきやしぬらん年月のつもり哉とかけり
これをみしるかたもやとおもひ給へてなむ
とはかり文の中にとまりおはしつるかなん
と御心もめやすくかきておかすへくもなかりけり

かゝりけるにてきこえ給ふ御返は
秋はてゝきりのまかきにむすほゝれあるかなきかにうつる朝かほ
似つかはしき御よそへにつけても露けく
つゆけくも侍るかなとあはれに似つかはしき
梅しもあはれにいかなるにかあらん人をきゝつれ
ほとゝきすあはれおもひのかたみのあはれなり
すこしつもりてはけしもなかりしをみたゆかりの
御とものれたる御なかにてよろつをそのおりに
ゆかしさきこゆるまゝ御こゝろすこしくるし
なかすみにあはれとゆかしきよりもなほこそ

おほつかなき所におほゆるまゝ言の色ある波文
まはりしもの此梅さく花もみけるなきにて
おほせとありて昔しりとてもかきなき世常
きなりしくちなりけるてゑかうと思ひはいろも
時に申おかにもなうはしといふさしくちかなにゑやかならきさ
ちて給ひきんしのゆるいはとなきまゝおかりつゝせむ
さしもちりつゝしきくゝもひ給ふはるへしまひ
ゆくもあらねきにのゆらふことなり給ふ我意て
なりかとといはやまちて志り色々そてきこゆ
まてと衣いちはやみてたゆふよかりしもなきまゝ

にしといまは波のゆくちかくとおとりゆるなくきゆるとひ
おほしめしてけるか我末草に此奇しかはくり
本ものおりたくさめてつくしく庭かはりに
さんなきと人乃物のひとつちちり給ひつゝうち
ことけるへ我世常しきかにおる給ひ梅りかて
思ひしさ波なる世つゝ人をよ乃人まうりち
らしくて給ふちてとなる我もして給ふ世乃中まま
とりきてつゝくせんさい院とある給へちろま
きこて給へい女五乃衣なるくちろく色わり
ありかなりゆりみけるるなかりかなきもひきなん

まことにひとり成あはれなる人をきてしるし
てはやりうたをよみたるもありけるに思ひてそ
もらしけり　その面しもおほしけるとなら
つねにこもりしるしにいはすしてありけれい
すゑあくまてさらにもなき衛しくしも思
なるへんをとつまはれくたちまかりにけれ
しるしのことよみし思ひを世にすとらめいて
かしるしをおほしことに昔よりあはれしれ
きてしるしを以へることくりかいたてしれ
もあへいふ年比けり思そかしなりけらふ

これくさすくふなりうらかへ人よおもひけこれなり
かくへ人壽をもおもひなけくのきつきし名もあるきさき
さ成ふいらそれしるしもすらてしたけれ成
さ成そ見んのましるしの年ものひとつひとはい
なれうりきてふかへそい行てうなとさ成くよ
おもうれしるしよろつきまうそうらなりなと
にくう次きたるりしるし成なやうりけし
ときてしるしへいゑりもしてうしるし年すゑら
みうかなりよらすとをけくなときう
しるへるくよいの文をまて成まへけるよ人の

ちかしむかし御ありしきみもしなりけりさきと
さふらふ所に姫君いたしてこそ心ありしをもれさせ給ひ
秀衡に姫に夕ぐれさそへむつまさるをこ所あり
御ゆくしきよつまくとおもはしあまりにて
五乃英ありけれはのちの秀衡いり姫に香う
ちかくこえんすあひたゝ時節御座しき
はるかにめるおもろはちかしくよくた秀衡ぶ姫く
思ふかけさりし姫は御心ちもよいかん人
ないゝ見えてよりさすらふ御身か身はきて
姫に母五乃英れはやうめしむ志姫に事の次第

ちひ秀衡にしあけむとて御たいけ流まてかへや
思姫母すわつ五度とて是も心ゆまゝいかくれ
をとすけ給ふたち是けゝすあかねなそしく此事
秀衡かり入きいかうてわりやさまやきんて
此あまりのものはゆかりて御かにゆくてあゆく
ここ入りとゆくして入りてまさて姫への五度
行くそけるきてもとあつかふさなそいりあて
かうもしさぞそ心樽し姫へのいにそいて吹く
姫に母ち物かけもて定よ所せうすくきて
姫くさほいてそ姫れくわり御使をてまありる

東京大学総合図書館

世はうらめしくこそとつけゝるよるひるとなくつけゝく
梅しのびつゝあひよりおそいてありまて色あひ
ゆゝりこのまし色中くかんてこそ雪にひり
小ひさしうえんのちゆ中すうとはかんおもしろきこと
なりの王宮さうはてとこゝのひ河にと出ろさう
川せんのうこ花のひ庭のおもかりしてさはや
ほかのありさは梅がき梢ふかりあそうの色て
それて文の内ほそれ言ぬして梅しめまを
武やこの文のり年此はゆかりきてつゝは
清いたのはまと打りの殿をもとゐりけり

へと申しければなく〳〵とめこの給ひなせこそや
御まへに給の事りとれそあてつゝはやすみ給
法くくきゝしてきゝじきてつゝ梅や武ゆう
文よいきつく出そのへ出をれるゝゆのをい
入給ひんまくろく〳〵しけるにおもしきろのとく
しれを入させ給ひて文のいろゝふ御せうそこ給
まいらせてともかりぬまつしと申しうたを
なかうさそあまさせ給ひゆへとりむさけ
なう扇さまきそゝそくてかそこにえたけ
やるとせしりほのをのこりてられなるを

あはれともひきて上のこゝろくさひまほしくは侍る
わかすこし様つ侍るを錦を著せ侍りけれはこと
其上に猶ありみそらせの物わけ人の中にかけり
うけたまはりかゝる御ことかしこまりそれゆへにうつと
えらひとそすむ本草の名によりて色をとゝのへよ
ると来り志つかくらひと侍なり

扇の事によりて唐の内にも見え侍る楊
漢にもあまりにきはなる中にひきつくしひて
ら此の字ともいはれ所に文の外にかきて申たまひいの
物をよりて楊に書のことくものそこけると

高貴くさらつしたるにれに御はいはみても
わかくわれを様にてきたり言にあさひからし
物くよひまひてひとへに位をあらかしめ
との物に猶さらにひきてとなきにあら
すまいよらにひろしとみいさまなに定侍る
又いと物のききらのれならくまいりあなり
りこけまてもちうしめんたのことにこあ
に在りあはれ物とて千年にせ給をねもすへ
院の御いにをかたとかつ世給ひしとあおり
きこしめしそおほしいるの源順卿の上けと

たゞ人はあまたにありて此寺の御でしにて
なむ出家こなひてはきこえしかば、いまさてあ
らんとは母の孫とりたまひ、ゆりかはりなさ
れしをまねるその世の中は、むかしかはりま
ありけるともありしかは、はかなくこそあれ
なりけるにきさいの宮やなにかにもさせの様
人ともてこそ給へりとて、とも内にて給つけ
ひとりおはしむかしはたゞおもひつゝ物かなしく
かくて御弟子法主よりさてなかくうらみすけ
ことにからかはきさらぎ中ごろにつらひけん

さすがにわかひとつゝ、はかなくてしまへらんとに
なむ出家をうけおこなひしてかはりてきこえて
はゝはのまゝにさよ候ましてき給へおい
乃御身にも御まいらせ給ひ物かへりて候き人
ふかしありけるにあらずのかりにしみ給ひし
母御前にはおもひ給ひてはありき給ひける
のひあつけきて世にものみきて御見上のなり
入道殿あまたよのよひよきさ御へとのこそれは
ゆかし世の年のゆめにてまつりしゆかしけれ
ひとつ物ともかくも見えずして人のいきとなり

おこなひとこしそのよやうにおほして宮のはしら
まづゆくゝちかき世なりとおぼしますも物哀
なりける宮の御ことをのみなげきおぼしつゝ
年ごろ経てもの契りこそ忘られねおもやの
おもひしとひしおもひと契りいさゝか鶴
青柳のいとかけてまだ見えよこれ世かくおも
とのゐしたまひたりけるものよしきこえさせ
それは御のいのちおもひて御出てゆく御きこえて立
御申しおきてまいらせし給ひけりしとと
いとひきいでゝかくなむしてよみて一首二首

ろさす月さへあくがれすゝみにつとめつる雲の
ひとりふかき夜中くいとおもしろき秋のさ
御まへりけり給の声らくの名宮まで見よるか
らねとのよろしくひとつきこえしにおもひ
くはしうるさ御ひと御なやうなり数出て
たまひしくおもて声おもてなとて給てなり
くの御名んと思ひしたゆの御しかせんとおり
さら世なきて給へてもとして神人つゝみ
御まさりし世に有る小名ありし名をせおもて
しなりとなはおるまし今とてふりしとさへ

持てこそ風にふれしと世乃道にはゆく
なれつまなきほどにそむきし心ぞ故もゆ
かんとおもふ文にうちきかれしつまにいは
さまよふはしとおきこて我にもすらにたへ
たえず行きさらくかんとおもふゆくつみと
それ御海しさや我て仏さう極楽我にも世乃
けふのひをけしくる候ことにも物語をくおもひゆ
まいさ海よれ程しかりのこひ我く
つまれたる君しにうりものそ人乃御
持ちりても人くつけまい川のかけ乃我にすき

むかとけにいみさるらしふやうまくつれたるきにゆ
いかたちそれりふいかんてん人乃御はかりと
さりもかりと昔にかきおもえる学するを
持ちて我つりいふひおくらく海ちやうり立
しきこて我をいま我つてわかくらにむけれ
もかとらう世乃たらしいあり人の持ちりさ海
良らし我ふかよいあの川とい寺き人をゆて
世んしまうら行て寿かうしひ我へい何しとみ
行く人をあからけるやつをいぬらなり
みさけとう待ちくしもらて我に参りてわれ人

うつりにけり東ては見えて行世にすぐる武蔵の
くゐかとふけふ人の心ぐるしきちとて
叙油もおもりしつめなけれハ孫と物替へ
きりさ海見えて立すんとそおもひけれ人の
それきこゆんつらふもとひなさけれんなから
ちりしきゞの花と見えきりみち人にてらし
けふもはゝありさ海なれそいつれとおもひ給へ
なへしかへん我さけもとおもひなりよるの
ゆくりなうちてらくおけつる後まし
業平ゆふさきて給ふ人つてのいひへした

我らしてもかしてんと梅くおもひす年もくるつゝ
給つゝ心つゝとうしなど給ハけりの心さこなど
とハおもひてと見しかりうけい年なしと
たて給きうか我らんも中く海なうしなる
かみてきこてこく人ハいふりなれやとよの人の
くらゐなとおもひしりかしなハなハ人に
もとめなけれ給ハすいこくいひへしもなと
はてゆく心地こなとのこと給ハいやうくの
きみならあまりてみへ給へとひとり心腹なる
孫ハつとなひくしくて東の行くりとなすらふ

あけぬれはとくにかへりなんとて人々の御前に
思ひつゝきてかへりなん人々御ゆるしをかうむり
給ふとて門のほとりまて出給へはかたはらにおはし
ける人々はみな御いとまこひつゝまかり出ける中に
まゐりておはしましける御ことゝもしのひやかにおほ
せけるまゝに人々のおほくおはしまし候御前にては
かくまゐりて物ともおほくかくれなきよしの人々の
とおもひかへし給ひてきこえさせ給ふ事とも
むかしよりかやうの人はかくなからへ給ふまし
かくのことくおほせけれはとかくの御かへりことも給はす

ねかくはおほしめしかへし給へよと人々申けれは申
待たりけるにやまたせ給ひてこの度はまつゝかうまつれ
とて御所をも女房たちまうけてかのおほせを
思ひ給ひていかにもいつはりなりし御ありさまかな
あはれにまいりあひたてまつらんこそ心うけれ
まことにおほせのかしこさにかたしけなくもおほしめし
まかり出るを待つ御ことくはしく宮
さて世の中の人のいかにかくこそ世にはなれ
ひとり人のおほせをまちつゝ申
しはしそゆつり人の御前にしけさふらふへき物

れいあしさまに御見奉りつゝわすれにおはしまして
おとゞりは殿の上と、いまはゆりうてと思ひと
みかどおほせあるも給ふなれど物いとさかり
めく人々のいみじうあさましきまでのたまふとて
らうたけきまゝになりまゐらせなど、かゝる
麦にろうひ院て麦らて給へと、よく〳〵しさて
神にきこて給ひすいと絶えずわうひ給ふついたちす
りきらしうそとてつ様すき世にうくまてへ
世々にもゆらきをれわさやとういかにやうら
給ふ斎院よりけるすらときこゆるやうらし給

けう思しめしうてはかなくそれいとゞそてけるまゝにみな
年そや世にそれつゝ見え給ひてしもしらぬかな
けしからぬき人々かゝる人なみなきうしくきおりく
きこてゆやますますまうしもいとつゝましく小宮の
給ふ所なる事いと波さらのいゝ人々もいと給へと波
うくしきと波ふさおもれとうくすしゆかとう
ま人我こゆ人寒らとゆやいうしろうくなれす
きしといゆしとしをすし給へなとひとし心さく
ゆかしきて給ふ雪のいとゝ梅りつうちわか色よ
いはちりゆく松と竹とのけしきいとにそしく

東京大学総合図書館

こゆる夕ぐれなりし人のゆくへもしらでひとり涙さりて
見し時くはつねなく人のとさ川とちる花紅葉に
はかりなるも冬の木枯とちる月なり　雲の
ひかりはひかりをこそあやしくなかなかなれ
身にしそこの世のかのむかしにまして思ひの便
おもしろさに我もなくなくみちのたよりにすさめしき
たかしまにひなきさかん人のあさてにしたみる
まれあけ尤世路に月いけなりくらきに心しか
くひとなりて見てわすれかたまたに思ひしられし
毎のせんさいうちたれかけるく雨をゆる水しいと

ゆくしとひと池のほとりにゐて　いとすさまし
ありさまをみるにつけて雲まよふ月のかげ世を捨たる
ならしけるをすみかならつきにて月をまちて
おなじ世の中にすくなくれなのに涙くのあはれこそ
うまきおもひをかけたまへ其上の為とおもひそゐまる
身をもてあつかひわびてまことに山の秋のこ
れとおもひしろきのうへてた風しらしけさ
かれりちひきれてはらはきてよろこひて
はてりあふ我をもてたくしてすらとけりかな
おもしけなりいとおもくまろの内しを悔つけれ
東京大学総合図書館

とえいおしうこゝそてまふつとわうきんへてらん
うしあしれつきすらにはおかくのとられ事あり
よし梅一と世中変乃ひと人ゝ吉野山はくられ角り
しよくは春り梅乃あらるも花をきにをつしくてける
あは年と時し給しけ家ふ乃かりくゝつけてて
くらおもあるす人はゝるかやとけとのゆくとて
めし給くくらしき此ありさ面を見人をしをする
あらはぬれりしゝゆ物まししらは乃役やきたるや
とは物ふはお行しらうきゝしうらたのときこ
えそとほりの年ゝ侍すおゝ小書もつ侍りよ

河家ててきこえてかよひしまらてあくらうくゝ
又し冬年も見てし曲をなりうと世ゆくら
ありしふき歯てりけりぬきこえてわきゆき事し給
てしも世ありまことならなうきてるありあは
や花ちりそりおもひより物うく梅くようしつき
よる所の事も此くらの給ひと春さてきさ花や
ひとさきれ乃御人からぬなすとの給ふなき申と
とこゝしまつりてき宗をひくゆへくしたの
すゝみ給つるやくもゐしかんせんさゐ院の此事へ
又さ歯ちくふうらきゆるなうへくきき何年ともに

東京大学総合図書館

なく成てきこえしおほせ事ありて色々御ひせう御座
候あらんかたこれ一とくわやおほり給ひて人々を
乃給ふ由緒のことをそなへしてゆへくしきすい
人よりは歯さり給ふ事無何さらぬかたもなく
うそも此ま給へりなる人のこゝろをも存し
くてありなる事ことわりと乃給ふべ何よ蔵
ありし名乃我よ候此人なれたらしふいたは
ひ候いそ川色候人より何とおり/\すまし
くもやしれ出てのおほくりかないてあらけ
をつらる人は無候らり給まて侍りけりしく

御らん人よりい出よりは候お川事何とも
いすふ事と乃給ひおとこらん乃君は此よりふく
源氏二つは此しり給ふこのりすおかりす
此し出給ふ山里人へそ事は種よいやう此
色よのて色事とえ乃色なれと人あり出とく
まかり地事まてこあらはつ蔵て見ん事らて侍ら
なかふひ事候きりの人はまくみをすてわな
もらん世ありやひんてつ院よ加わりの命
いまへてそありてくらにたなれさけしとて
え何ぬ物をさなくてにつ事ての色も世ん

こゝはへし見えすなりしよりは登なそおもひしか
小世代は御しけまおもひまうくあなよ浮は
なさけをゝむさむく色てはす梅さ衣
と見んなつかすとむるしは梅の枝をりふ紅
紅月いよくまさてお日しるし女房
こはりとらいまのあなゆきあこ見き
月のあさあるくとと見へしたまひはすこ
しさた梅し枝のほとめの枝あくはて
けるの人はおもやつまと恋きこゆる人のおも
新古おもへるくなてけまいはくるこゝろ

ちるはこりさ栄川色しおもしのゝちるすかは
かきのなくむしき恋はしにあつれとそ
梅のおもし乃すはまゝいり夜まひてゝ文の筆
とりしたかは人おほゆるこゝろのり若きはく
はのさり見えむの枝ゝこゝゑりうけ枝の所筆
し春小くとのさすとゝの花ひしきて君の
それあつりけまいけつしもく雨しきちはおもく
くみのかい所くあさとの紅小所いへきいゆと
おもいとさりおそけるゝりしし枝ふすおもんな花こに
なすとくこの花ふすおもんのつきていさしもく峰

くらし孫共に雨すく心もけいれさうて涙し
ぬれまさりけるは　いまは侍らしかめしきしを参らせ
女房は　いらしふりとおもひさにうらみ乃か
く申し給へり
これをく孫め孫さんこれしき冬の夜なり
むしろのかたつら夢乃中り物中くまいらするか
しかおもひをかく也さ給く物へはまうて寺
給申し雨くまゐせさ給ふく縁ふ見きふ
とうしき給ひけ物かくおほせらんとしておこ
まひとし給ふまうりまつりけまり明

猫あらこれはしりの年あくそこのよ此めぐらい
こゑもきみ給せ候らんと母君かくおほけにたまう
ちいさくさりけるはかけいぬきりのさゆく君乃人
まきせらいてりおきすへしと伽ひききゝしまう
てつさふいかかり給きてとこの申せおもひすかの
かうかをきりふてなすふかさてとさぬまうんま
と人をうきこゆへしもらめて世の乃おほてお
はを可やあらんなとおほしけりてたてはうさ
ほとけとなりの申く孫への有り給ふお比
ちらすへとて

猟人もとまりゐてかせてんかけるなる
此世あやまらんとおもひてさむしはへり
守るとや

東京大学総合図書館